

SNS動画戦争の衝撃と マスメディアの存在意義

文: 辻 泰明

筑波大学教授・博士(情報学)



日本放送協会において番組制作に従事した後、インターネット配信業務を担当。著書『映像メディア論 ―映画からテレビへ、そして、インターネットへ』、『インターネット動画メディア論 ―映像コミュニケーション革命の現状分析』、『平成期放送メディア論 ―テレビからインターネットへの転換はどのように進んだのか』など。

ウクライナ侵攻の戦争映像が有する 歴史的意義

19世紀の末(1895年)に映画が誕生して以来、動く映像は、戦争を伝えるメディアとして用いられてきた。1898年の米西戦争や1899年のポーア戦争の映像は、ニュース映画として上映され多くの観客を集めたと伝えられる。20世紀半ばに映画からテレビへと映像メディアの主役が転換すると、戦争の映像は家庭のリビングルームに直接送り込まれるようになった。20世紀後半に生じたベトナム戦争では、テレビ画面に映し出された戦場の光景がアメリカの世論に大きな影響を与えた。

21世紀の今もまた、ロシアのウクライナ侵攻による惨禍が、映像によって、日々、伝えられている。

しかし、このウクライナでの映像メディアによる戦争映像の伝播の様相は、従来の映画やテレビのそれとは決定的に異なる歴史的意義を有している。映画やテレビでは、戦場の様相を撮影し、記録する者は映像制作のプロフェッショナルたちであり、伝播する媒体はマスメディアだった。ところが、ウクライナでは、アマチュアの人びとが、スマートフォン搭載のカメラによって撮影したと考えられる映像がSNS動画アプリによってインターネット経由で拡散されている。

映画、テレビだけでなく新聞やラジオなどを含むマスメディアでは、送り手が受け手に対して一方的に情報を送る。これに対して、インターネットは、従来受け手だった一般の人びとも情報を発信し送り手となることができる。20世紀においては絶対的な存在だったマスメディアの優位はインターネットの普及以後、さまざまな側面で崩されてきたが、ここにいたって戦場の映像を記録することと伝播することにおいても、インターネットがテレビを凌駕する存在になったと言える。

兵器としての映像

動く映像は、戦争における宣伝戦の手段としても用いられてきた。第2次世界大戦中、イギリス情報部は、ドイツがその戦果を宣伝するために制作した映像を分析し、ナチスドイツは、陸海空に加えて、撮影部隊という第4の軍を持つと評した。ウクライナの戦争では、SNSでの動画配信がウェブを通じて拡散され、威力を発揮している。ゼレンスキー大統領は通信回線によって各国の議会で演説するという新たな態様を実現した。戦争中の為政者の演説は、20世紀においてはラジオ、テレビ、映画などによって伝えられていたが、そこにはマスメディアが介在していた。ところが、ウクライナでの戦争では、マスメディアを介さず、直接、各国民を代表する議員たちに向かって演説をし、その様相を2次的